矢羽勝幸著

信濃の一茶

化政期の地方文化

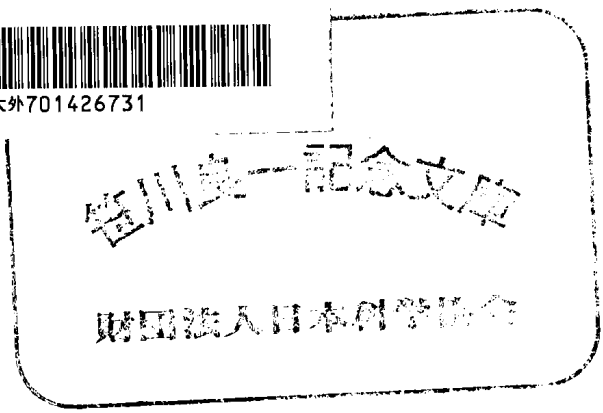
中公新書

1205

83363

中公新書 1205

大外701426731



矢羽勝幸著

信濃の一茶

化政期の地方文化

中央公論社刊

矢羽勝幸（やば・かつゆき）

1945年（昭和20年），長野県東部町に生まれる．国学院大学文学部卒業．現在，二松学舎大学文学部教授，国学院大学文学部兼任講師．専攻：近世文学．

著書『一茶　父の終焉日記・おらが春・他一篇』（岩波文庫）
『一茶大事典』（大修館書店）
『おらが春』（和泉書院）
『加舎白雄全集』（共編，国文社）
『俳人白雄人と作品』（信濃毎日新聞社）
『姨捨山の文学』（同上）

信濃の一茶
中公新書 *1205*
©1994年
検印廃止

1994年9月15日印刷
1994年9月25日発行

著　者　矢羽勝幸
発行者　嶋中行雄

本文印刷　三晃印刷
カバー印刷　大熊整美堂
製　　本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋2-8-7
振替 00120-4-34

Printed in Japan
ISBN4-12-101205-4

まえがき

一茶が生涯に残した俳句は、およそ一万九千句、日々の出来事を克明に記した日記や手記もたくさん現存し、中年以後数十年にわたる動向はかなりの精度で明らかにできる。これは今からおよそ二百年前の人間として、まことに稀有なことといわねばならない。

肉親の愛にうすく、日々を漂泊に送った生き方も特異なら、そこから生み出される作品もまた人を驚かすものが多い。

われわれが一茶の生と作品をとらえようとする時、特に注意を要するのは、この膨大な「量」と「特異さ」の問題である。これに対する客観的な視点、つまり江戸後期における一般的な文化の傾向や俳壇情勢などを、常に用意し、対置する態度が必要であろう。そうしないと一茶の「個」に埋没し、真実の姿をとらえることはむずかしいだろう。

近年一茶を主人公とした小説や戯曲が多く発表されているが、あるいは飄逸な好色爺であったり、推理にたけた市井の人情家であったり、一茶の一面を切りとったにすぎないものが多い。

いっぽう研究面においても前代の「童謡詩人」（よく良寛と並べて評価された）などに対する反

発からか、ことさら弟との亡父遺産問題にからむ強引な一面を強調し、生涯と作品をリアリストとして規定しようとする傾向がみられる。作品についても十分な検討もなしに芭蕉と比較して安易に結論を急いだものもあとをたたない。

これらは、いずれも一茶が膨大な量の自己資料を今日に残したゆえの不幸のように思われるが、しかし、研究にとって一級資料は多いにこしたことはない。大事なのは、それを扱う客観的な視点であろう。

本書は、右のような見方に立ってまとめた信州帰住以後（文化十年～文政十年）の一茶の俳諧活動に関する覚え書である。序章では予備知識として一茶の生涯と作風を概観するが、特に帰郷の経緯を詳述する。一章では、一茶をとりまく北信濃の俳壇の客観的情勢と、社中を形成していく過程、社中の実態について述べる。また、これらの俳諧活動を一般の業俳（職業俳人）と比較し、宗匠としての一茶の一面を検討する。二章では、特に一茶の個性の認められる巡回指導、俳書の出版、文通による諸国俳人との交流について考察する。三章は、一茶の知的生産の方法、特に作句方法と同時代の業俳の目からみた一茶調について新資料により考察を加えた。また、従来逼塞（ひっそく）と解されてきた信州帰住が、一茶における最も輝かしい活動期であったばかりでなく、化政俳壇においてトップの名声を得ていた事実を俳人番付・入集句などによって明らかにする。末尾の年譜は、本書の性格上、信州帰住以後の記事を特に詳記した。

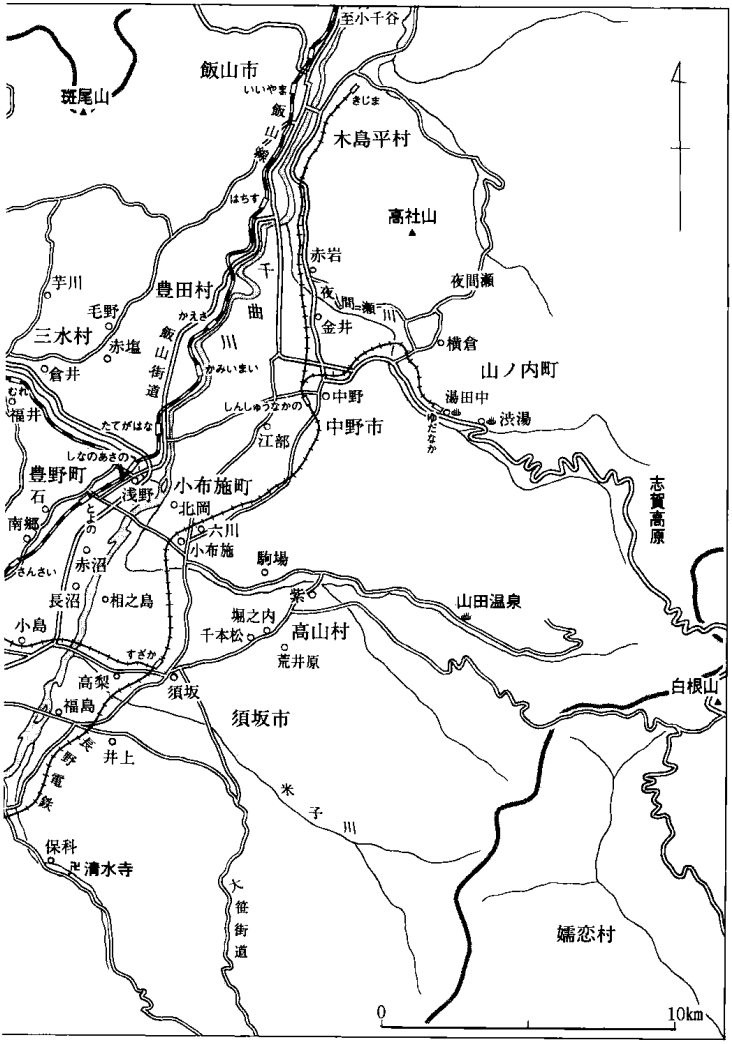
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

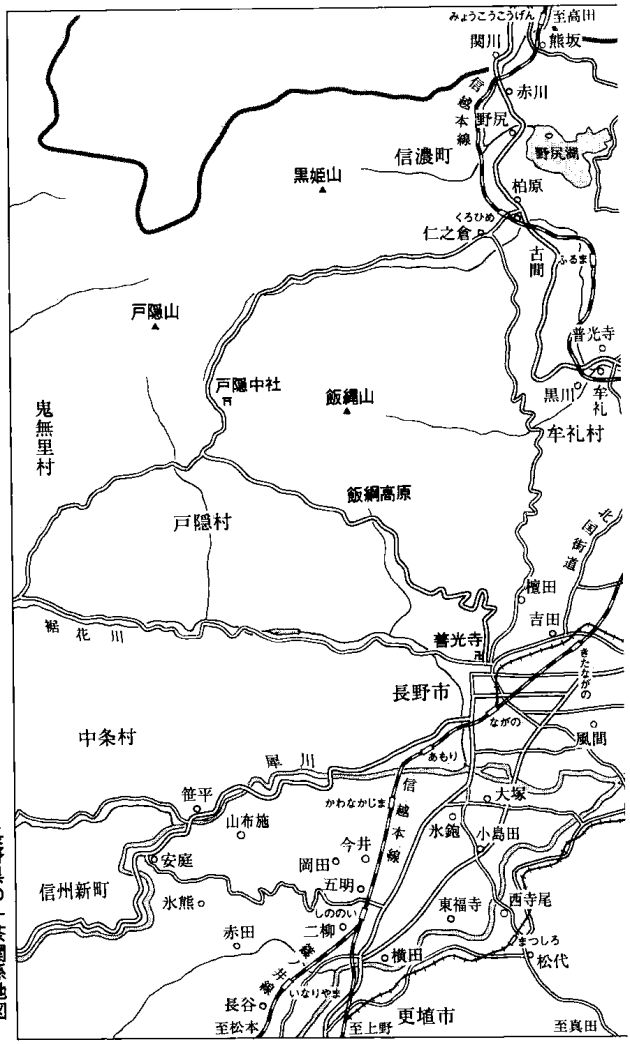
俳人としての一茶は当然俳諧において評価されなければならないが、地方文化が全国的に大きく台頭しはじめた化政期、一茶を含めて、俳諧が地方文化に果たした歴史的役割を文学の枠をはなれて別の大きな視点からみつめ直す必要があろう。本書は、一茶の俳諧活動について述べるものであるが、同時に右のような地方文化史研究の視点を採用している。

本書をまとめるにあたり、末尾の参考文献に記した先学諸氏、写真及び資料の提供に御協力願った荒川詔夫、池田煥曜（向源寺所蔵資料）、岡崎光雄、小林俊郎、故清水一雄、関保男、福島憲太郎、宮田正信、宮本宗裡、山岸昌弘、山口太一郎、吉田幸一、一茶記念館（文路宛書簡）、糸魚川市歴史民俗資料館（素檗自画賛）の各氏に深く感謝の意を表する。また編集・刊行にあたっては、中公新書編集部の木村史彦氏に多大の御助力をたまわった。ここに併せて深謝申し上げる。

平成六年八月

矢羽勝幸


至小千谷
飯山市
斑尾山
いいやま
飯山線
きじま
木島平村
はちす
高社山
赤岩
夜間瀬
夜間瀬川
千曲川
豊田村
芋川
毛野
三水村
赤塩
かえさ
飯山街道
金井
横倉
山ノ内町
倉井
かみいまい
福井
たてがはな
しんしゅうなかの
中野
湯田中
渋湯
ゆだなか
中野市
江部
しなのあさの
豊野町
浅野
小布施町
北岡
石
南郷
六川
小布施
志賀高原
とよの
赤沼
さんさい
長沼
相之島
駒場
紫
山田温泉
小島
堀之内
千本松
高山村
荒井原
すざか
高梨
須坂
白根山
福島
須坂市
長野電鉄
井上
米子川
保科
清水寺
大笹街道
嬬恋村
0
10km


みょうこうこうげん
至高田
熊坂
関川
赤川
信越本線
野尻
野尻湖
信濃町
黒姫山
柏原
くろひめ
仁之倉
古間
ふるま
戸隠山
普光寺
黒川
牟礼
牟礼村
戸隠中社
飯縄山
鬼無里村
飯綱高原
戸隠村
北国街道
櫨田
吉田
裾花川
善光寺
きたながの
長野市
ながの
風間
中条村
犀川
あもり
信越本線
大塚
笹平
かわなかじま
山布施
氷鉋
小島田
今井
安庭
岡田
信州新町
五明
氷熊
しのの
東福寺
西寺尾
赤田
二柳
まつしろ
横田
松代
一本柳
いなりやま
長谷
至松本
至上野
更埴市
至真田

長野県の一茶関係地図

目　次

まえがき

序章　一茶の生涯……1

生いたち　俳諧師への道　脱皮　葛飾派から成美グループへ　業俳活動　父の死と第一次遺産交渉　第二次遺産交渉　ふるさとへ　第二の人生

一章　北信濃の文化状況と一茶社中……25

一、一茶帰住以前の北信濃の文化状況　26

雑俳　堀若翁の影響　新風の指導者猿左　農村の変化　初等学問としての俳諧　猿左と一茶　虎杖一門と一茶　何丸と一茶

二、一茶社中の形成過程　51

第一期〈柏原・野尻・毛野〉　第二期〈長野・浅野・江部・長沼・古間・紫・堀之内・千本松〉

第三期〈湯田中・中野・石〉　第四期〈蔵々・関川・牟礼・横倉・芋川・普光寺・赤川・熊坂・二俣〉
三、宗匠としての一茶　74
一茶の門人指導　定例句会「月花会」　句稿の添削、点取句合の出点　定期刊行物の発行
二章　巡回・出版・文通
一、巡回行脚　94
遊歴者と地方文化　俳人の行脚　一茶の巡回行脚　似鳩の旅日記　郷原における似鳩
二、出版活動　120
北信濃の出版　北信濃の彫工
三、一茶の著作　127
『三韓人』　未刊本『一韓人』　未刊本『漏殿』
未刊本『おらが春』
四、代編書　135
魚淵の『木槿集』事情　『あとまつり』編集から

配本まで　『杖の竹』の刊行　『たねおろし』の刊行
五、未刊の代編書　146
春耕『董塚』　文路『おらが世』　希杖『二僧塚』　二休『ほふほけ経』
六、諸国俳人との通信　150
通信の方法――鈴木牧之の場合　一茶における通信の方法　飛脚　個人ルートの通信
三章　一茶の作句法と知名度……179
一、作句法　180
情報処理法　生涯二万句――努力の所産　同時代人のみる一茶調　すさびたる風調　金銭俳句　権力者批判　方言俳句
二、俳人番付にみる一茶の人気度　197
江戸在住時代の人気度　帰郷後の人気度　広範な地域からの来訪者　揮毫依頼　序文の執筆依頼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

一茶年譜 213
参考文献 226

序章　一茶の生涯

一瓢遺愛の一茶木像

生いたち

一茶は、宝暦十三年（一七六三）五月五日、雪深い信越国境信濃国水内郡柏原村（長野県上水内郡信濃町柏原）の農家の長男として生まれた。本名を小林弥太郎という。小林家は代々の農民で、父弥五兵衛は、柏原の農家百三十八戸中四十七番目（一茶出生当時）という中農の本百姓であった。生家は、柏原の南の入口近く、北国街道に面した伝馬屋敷で間口九間三尺、奥行きは十二間（二百十八坪）ほどあった。家族は父母のほかに祖母がいる、ふつうの家庭であった。

しかし、一茶三歳（数え年。以下同）の時、母が他界、もっぱら祖母の手で養育された。明和七年（一七七〇）八歳の折、父が再婚、近在三水村から継母が入った。そして二年後には弟専六（仙六。のちの弥兵衛）が生まれた。一般家庭の常として祖母と継母における〝嫁姑〟問題、祖母に溺愛されたであろう少年一茶は、両者の間でもみくちゃにされたかもしれない。それでも祖母が元気なうちはよかったが、一茶十四歳の秋、この世を去った。継母との仲はますます悪化した。

こんな時、男はまことに頼りない。弥五兵衛にとって後妻も一茶も等しくかわいいのだが、ただオロオロするばかり。けっきょく後妻の言を入れて長男一茶を江戸に出すことになる。近世の家族制度は特に長男を優遇している。信州の農家では、長男の待遇が、二、三男を超えている例

をいまでもまま見うける。時代はやや下るが、寛政九年（一七九七）における柏原の江戸への奉公人（年季）は三十人、天保十二年（一八四一）は五十一名ときわめて多く、このうち長男が十四名もいる（表1。『柏原町区誌』より作成）。一茶十四歳（奉公に出る前の年）の折の生家の持高（もちだか）は三・七一石で、表1のうち幸作の例とほぼ同じである。幸作も何らかの家庭事情があったものであろう。しかし、ほとんどの長男の江戸奉公は、家庭の貧困（平均一・六四四石）が主な理由であったろう。また、父が一茶を江戸に出す決意のかげに、恒常化した柏原の江戸稼ぎがあったことも、これらの数字から考えられる。

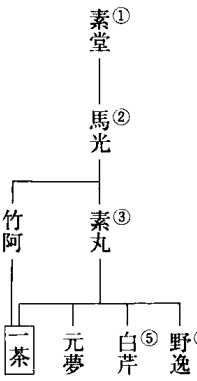
表1，天保12年
柏原村江戸年季奉公人（長男）

奉公人名	年齢	家族数	持高（石）
団之丞	17	6	3.353
千代次	36	3	2.9
常　蔵	18	7	1.1687
富太郎	25	4	1.232
与三八	23	4	2.462
九郎次	34	3	0
喜代次	30	3	0
万三郎	12	4	1.157
与　作	19	6	0.258
太　吉	24	5	3.069
吉太郎	10	7	0.26
菊次郎	28	5	3.4
幸　作	36	3	3.7599
若三郎	45	3	0
平均	25.5	4.5	1.644

長男であった一茶は、やむなく江戸に出るが、自分をかばうことのできなかった父への不信感は強く残ったにちがいない。この複雑な生い立ちは、一茶の性格とその後の文学に微妙な影を落とすことになる。

俳諧師への道

出郷後の具体的なことは何もわからない。後年の述懐によれば、一つの職場につとめたのでは



なく、多くの職場を転々としたようだ。そして二十歳頃にはすでに俳諧を知り、プロの俳諧師を志していた。

一茶の所属した俳諧グループは、芭蕉の親友山口素堂を祖とする葛飾派である。素堂、馬光と隠者肌の人物が続くが、素丸にいたって俄然政治力を発揮、折からの芭蕉復権運動に便乗して「葛飾蕉門」の旗印をかかげ、江戸、房総地方に俳圏を拡大した。しかもその俳風は、俗談調であまり格調の高いものではなかった。

今日一茶作品と確定できる最も古い作品は天明七年（一七八七）長野県南佐久郡の新海自的が父米翁のために編んだ『真左古』である。

是からも末だ幾かへりまつの花　渭浜庵執筆一茶

二十五歳の一茶が、当時江戸浜町にあった素丸の渭浜庵にあってプロの俳人になるための執筆の役に従っていたことがわかる。執筆は、正式俳諧興行の折の書記役であるが、俳諧の基本ルールはむろんのこと、結社の運営まで精通していなければつとまらない。上京後比較的早い段階で俳諧を知ったのではなかろうか。無学の田舎青年が素丸に認められるまでにどれほどの忍耐と努力を要したか、容易に想像されよう。

このほか天明末から寛政初頭にかけて、同派内の宗匠である小林竹阿、森田元夢（安袋）にも師事、一茶号のほかに菊明、圯橋等の別号を名乗っている。この頃のことは不明なことが多く、今後の発掘・研究が期待される。

脱　皮

寛政元年（一七八九。二十七歳）には奥羽地方に行脚、松島と象潟に足跡をしるしている。『おくのほそ道』は当時すでに俳人の古典中の古典であり、なかでも松島と象潟は東北における祖翁芭蕉のかがやかしい俳跡であった。それらの故地を巡り、他派の俳人に接触することはプロをめざす者にとっては必須の修業と考えられていた。

寛政四年には、西国行脚に出立した。京坂、四国には特に師竹阿の遺弟たちが多く、それらを巡りながら俳諧の研鑽を試みたもので、足跡は九州、中国にまで及んでいる。しかも寛政十年まで足かけ七年にわたる長期行脚であった。

幸運なことに、行脚中芭蕉百回忌（寛政五年）の行事が各地で催され、流派の交流が盛んに行なわれた。一茶は当時の著名俳人、高桑闌更（京都）、岸丈左（同）、大伴大江丸（大坂）、黄華庵升六（同）、栗田樗堂（松山）といった人々と親交を結び、作風を一変させたばかりでなく、俳壇にもしだいにその名を知られるにいたっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo